

# Our Life 121号

＊  
内  
容  
＊

- 第29回日本福祉文化学会大阪大会における本会実践発表から第30回大会へのプロセス……P.1
- 協働による「静岡発 福祉文化の創造」を検証 焼津市「港地域ささえあい講座」の手応え……P.2
- 「若者発 ご近所福祉かるた」復活の時 身近な学び合いで、今こそ地域活性化に挑戦……P.3
- 「居場所」から子どもを育む地域づくりを議論／第3回公開型研修会のご案内……P.4



## 謹んで、新春のご祝詞を申し上げます



あっという間に、2019年を迎えました。本会は今年、24年目の活動へと進めてまいります。

今こそ、「静岡発 福祉文化の創造の時代」を迎えていることを実感します。第29回日本福祉文化学会大阪大会において、「静岡福祉文化を考える会 23年間のプロセス 意識と実態調査研究活動からの検証」と題して、17年ぶりの実践発表を通じて、本会の活動基調は、福祉文化の創造をしっかりと内在していることを検証できました。参加者から、活動の原点に立った福祉文化実践活動の持つ意味は大きいと評価をいただきました。改めて、今年も、地道な取り組みを大きく地域社会に提言していく努力をしましょう！

### 第29回日本福祉文化学会大阪大会の本会実践発表から第30回へのプロセス

第29回大阪大会における実践発表「地方発福祉文化の創造」23年のプロセスから－調査結果から見る県民の意識と実態の変化－（平田・河野学生会員）の概要を紹介する。

本会の結成は、県内の高校生から先輩市民約70名の運営により、阪神淡路大震災発生1年後の1996年3月「第11回日本福祉文化学会・福祉文化現場セミナー」の開催が契機。“人間らしい豊かさをめざして、今文化としての福祉を語る”をテーマに全国から400名もの参加で議論を深めた。静岡発 みんなで語ろう 福祉文化の火を消さないようにと、9月に「静岡福祉文化を考える会」は、活動基調を、(1)さまざまな分野で活動する人達が、専門分野と世代を超えて交流を図る、(2)会員だけが求心的・閉鎖的に集うことなく、広く市民に開かれた活動をめざす、(3)既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切に、つねに市民生活に密着した活動をめざす、をもとに23年目の活動に取り組み現在に至る。

結成以来23年間、「調査研究活動」を基に「地方発福祉文化の創造」を発信し課題提起をしてきた。

本会の活動方法は、「意識と実態をもとに、その時代の地域課題をテーマに県域の調査研究活動の実施」「地域住民と向き合い、調査の課題を検証する現場セミナーの取組み」「調査結果から浮き彫りになった提言を広く公開型で市民と共に検証する研修会の開催」の3つの柱立てと、広報誌『Our Life』（毎回200部発行・現在までに119号発行）、「若者発 ご近所福祉かるたの製作」（県委託事業・赤い羽根助成事業等）により、広く県民に「福祉文化の創造」の実践的体験的手法を積極的に展開してきた。

最近3年間の「若者の地域参加」（2015年度実施）、「ご近所福祉」（2016年度実施）、「居場所」（2017年度実施）のそれぞれの意識と実態調査結果から、地域コミュニティの希薄化・個人志向化、共助意識の弱体化・公助依存の傾向が浮き彫りになってきた。専門性（制度）と市民性をいかに融合できるか、大人社会が若者社会と共生し、協働出来る仕組みを構築できるかを働きかけていく時代を今迎えている。

第30回名古屋大会では、これまでのプロセスから「子どもを育む地域づくり」を課題してみたい。

## 協働による「静岡発 福祉文化の創造」を検証 この3年間の「焼津市港地域ささえあい講座」の手応え

本会は、平成28年度から平成30年度まで3年間、焼津市港地域づくり推進会主催の（中学校区約5,000世帯の地域の組織）「港地域ささえあい講座」に協力団体として関わりをもった。

その理由の1つ目は、福祉を「見える化」「わかる化」していく手法を提供できると感じたことである。具体的には、「若者発 ご近所福祉かるた」を活用して、立体的に住民同士が学び合える環境を保障できることがあげられる。

2つ目には、精力的に講座を展開するためには、問題提起をして行くための資料化の必要性が求められていた。本会河野学生会員自ら、港地域に3年間足を運び、住民と向き合う中で、「テキストの作成」「講座通信の発行」「講座報告書の編集発行」「ワークショップの手法にPowerPointを積極的に導入」等に、精力的、献身的に関わろうとする「若者力」を発揮し、地域の若者の存在を示し、世代間交流、これこそが「福祉文化の創造」であることを強調する場と確認した。併せて、焼津市内の本会員が、身近な研修に参画できる機会にもなったことであった。

さらには、いま、地域社会の組織が希薄化・弱体化しているのではないかと思う時に、「今こそ、地方発、足元発の福祉文化の創造」を訴えていくことの必要性を認識し、呼びかけると感じた。

「講座の目的」を明確にし、常に地域活動の原点を踏まえて、これまでとこれからに向けた地域活動に取り組んでいく必要性を福祉文化実践活動から問題提起出来る機会を確認することができた。

「プロセス重視」は、本会の重要な活動基調にも合致する。また、住民主体の活動こそ、「福祉文化の創造」そのものとも置き換えられる。

「集める地域づくり」ではなく、「集まる地域づくり」を検証する「地域の福祉問題」を身近に学び合う学習の企画の提案をしてきた。

この講座は、介護保険制度改正に伴う、社会の大きな課題提起が私たちに向けられていることの気づきでもあった。介護保険制度により、これまで長いこと培われていた「共助」は、いつの間にか、私たちの身近な地域社会から見失ってしまったと感じる。「公助」「専門性」により、私たちの生活は保障される、極端に言えば、人々の意識を大きく後退させている。制度に当てはめられた「共助」では意味がない。制度の改正によって気づくことなく、地域社会の主体性により「お互い様」「ささえあいの精神」を復活したいものだと感じた原点がここにもある。

平成28年度最初の講座企画書を紐解くと、講座の開催趣旨を次のように表明している。「今日、私たちの周辺に、これまで聞いたことのない「長寿者不明」「無縁社会」「有縁社会」「老人漂流社会」……が飛び交っている。また、5年半を迎えた3.11東日本大震災は、私たちに、あらためて、「地域の絆」等数々の教訓を投げかけてくれている。懐かしい、あの頃、何キロも離れた家も、昔は“ご近所”でした。

その“ご近所”同士が、お互いに支え合う地域に、「福祉文化の視点」を提供し、楽しく、そして、語れる環境により【地域総合型学習】（ワークショップ）の展開方法を提供することができた。

人任せにしない一人一人が地域活動に参画出来る地域環境づくりにも努めることができた。



## 「若者発 ご近所福祉かるた」復活の時 身近な学び合いで、今こそ地域活性化に挑戦

平成 20 年度から平成 26 年度の 7 年間の本会活動では、「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」（長寿者の孤立防止）に取り組み、世代や領域を超えた“ご近所福祉の再構築”の重要性を浮き彫りにし、そこから「ご近所福祉かるた」の創作に着手した経緯がある。平成 25～26 年度の 2 年間、各種研修会参加の若者たちの意見を地域に反映し、加えて若者の地域参加の重要性をあわせて訴えたいと、200 程のキーワードの意見を「読み札」に置き換え、「若者発ご近所福祉かるた」の誕生につなげる努力をした。昔から今日まで、四季を通じた日常生活のあそびや学びの中に取り入れられている「かるた」を素材として、これからの“ご近所福祉”を幼児から大人まで、世代を超えて、身近な地域の実践活動の場や行事の中で、「地域総合型学習」の学習教材として提供し、楽しみながら安心して暮らし合う生活圏づくりをめざし、これからのコミュニティづくりに活かそうと、問題提起をし、尊い平成 27 年度県共同募金・広域福祉活動助成事業（100 セット制作費等）をいただき創作することができた。

「絵札」は、漫画家 法月理栄様（これまで福祉漫画を多く手掛けている、また“ふじっぴー”の生みの親でもある）。法月様と協議を積み重ね、多大なご理解とご支援により、すぐに作画作業に入っていた。 「わかる化」「見える化」には、実にぴったりの作画。実際に、福祉やコミュニティの現場にもたびたび足を運んでいただいた労作でもある。主な 100 セット設置場所は、東部管内：沼津市社会福祉協議会×4 セット、富士宮市社会福祉協議会×6 セット、中部管内：静岡福祉文化を考える会代表宅×5 セット+ジャンボかるた×1 セット、焼津市港公民館×6 セット+ジャンボかるた×1 セット、かいらハウス×4 セット、NPO 法人泉の会×4 セット、西部管内：NPO 法人磐田まちづくりネットワーク×4 セット、伊豆管内：西伊豆町社会福祉協議会×4 セット、本会会員、若者発“居場所”あり方研究会…etc.

よく、地域で議論する中で「一体、子ども達は、どこで地域のことを学び合っているのか?」「学校教育から協力してほしい要望が沢山ある中で、地域からもっと、地域づくりについて、学校とりわけ教職員も地域に目を向けた協働の関心を持つことが必要ではないか。コミュニティ教育は今重要だ。いかにして、地域の子どもを地域で育むことができるかの力を地域社会が担わなければならない。その環境づくりの課題解決が急務」と、現状の地域社会再構築を願う意見が聴かれる。今日まで「ご近所福祉かるた」を利用した団体からは、その都度、FAX や手紙を通じて利用した感想が寄せられている。「かるた取りになると、いつもは控えめの A さんなどは、身を盛りだして張り切っている」「昔は意識しなかったが、今では気にしないと付き合いも大変」「若い世代とはなかなか歯車が合わない」…etc.

このたび、本会では、前述の焼津市「港地域ささえあい講座」で「ご近所福祉あれこれ」をテーマに、この「かるた」を活用した「ワークショップ」を展開した。単にカードを取り合うのではなく、カードに秘められている「キーワード」をもとに一つ一つ議論を深め合った。また、昨年暮れには、子ども達と大人も加わった「地域交流の集い」で「かるた」をプログラムに加えた。実に真剣な光景が生まれたのには驚いた。

創作以来 3 年が経過した「若者発 ご近所福祉かるた」。いまこそ、「かるた」再デビューの時。大いに活用しましょう。問い合わせは、090-4861-54547（平田）まで。



## 事務局日誌拝見（10/20～01/20）

- 10/20 ▶ 第 194 回委員会開催／第 17 回静岡県福祉文化研究セミナー開催（15 名参加）
- 10/23 ▶ 第 17 回静岡県福祉文化研究セミナーに関する新聞記事掲載（中日・静岡）
- 10/26 ▶ 調査票回収 616 枚
- 10/31 ▶ ふじのくに未来財団に、11 月 16 日報告会関連パネルを届ける
- 11/02 ▶ 調査票回収 765 枚
- 11/05 ▶ 「Our Life 120 号」編集作業開始
- 11/08 ▶ 調査回収締め切る **801 枚回収**（協力団体・個人には、その都度礼状文書と事後処理）
- 11/10 ▶ 焼津市港地域づくり推進会主催「第 3 回港地域ささえあい講座」支援協力  
▶ 調査研究活動は、これよりデータ入力作業から分析・考察作業に移行する
- 11/16 ▶ ふじのくに未来財団「平成 29 年度助成事業団体報告会」で報告
- 11/20 ▶ 「Our Life 120 号」発行／会員及び関係方面に発送作業
- 11/24 ▶ 日本福祉文化学会に、本会「Our Life 120 号」を紹介との連絡有
- 12/08 ▶ 焼津市港地域づくり推進会主催「第 4 回港地域ささえあい講座」支援協力
- 12/20 ▶ ふじのくに未来財団助成事業申請手続き実施
- 12/26 ▶ ふじのくに未来財団助成事業申請手続き受理したとの連絡有
- 12/30 ▶ 調査個票データ 801 枚入力作業完了
- 01/07 ▶ 調査データ単純集計作業／「Our Life 121 号」編集作業実施
- 01/15 ▶ 調査データ単純集計作業から考察作業検討／「Our Life 121 号」発行及び発送作業実施

### 大いに、語りましょう「静岡発 福祉文化の創造」めざして 「“居場所”から子どもを育む地域づくり」の調査結果を基に議論します。

#### 第 3 回公開型研修会のご案内

平成 30 年度は「子ども」をキーワードに、これまでの本会活動を継続しながら、これからの地域づくりを議論します。既に 801 枚の「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査結果」を基に、参加者同士で議論を深めてまいります。

- ▶ 日時：平成 31 年 3 月 22 日（土）13:30
- ▶ 会場：静岡市葵区県総合社会福祉会館 1F
- ▶ 研修テーマ：「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりとは」
  - ① 基調報告 「地域ぐるみで子どもたちを育むには」（調査報告）
  - ② ワークショップ「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりを考える」

#### ●福祉文化実践活動をご一緒にしませんか？

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災(1995)翌年度の平成 8 年 9 月 1 日に発足し、平成 30 年度に 23 年の節目を迎え、新たな節目に向かい、「福祉文化の創造」に取り組んでいます。

本会の活動基調は、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合学習の企画と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」のもと、さまざまな分野で活動している会員が、身近に感じている地域社会全般の課題解決に向けて市民の視点で活動をしています。

- ◇ 会費：社会人 3,000 円 大学生以下 1,000 円
- ◇ 問い合わせ：420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5  
静岡福祉文化を考える会事務局 Tel & Fax: 054-246-1486

#### 編集後記

新しい年を迎えると、新鮮さと共に、新たな次年度の活動目標を検討していかなければならない。会員数の減少と共に、地域社会全体の「福祉意識」の希薄化が気になる。

昨年年第 29 回学会大阪大会で、17 年ぶりに本会の実践活動を発表し、「地方発 福祉文化の創造」こそ、これから求められると、参加者は、本会の活動基調の意義を評価した。24 年目の活動に入る。「何とかしなければならぬ、何とかは何か。経済界から、時代を掴む・韋駄天・スピード感・躍動感・想像力などが聞こえてきた。何か、福祉文化に共通する言葉にも置き換えられる。